

ハミ村——韓国にとって終

わらぬベトナム戦争

脱走・兵役拒否・虐殺現場

での追悼の言葉

高橋 武智

話は2011年秋にさかのぼるが、吉川勇一さんと武藤一羊さん、あわせて160歳のお祝いの会があったとき、ジャテックに関心をもつ二人の韓国人学生に紹介された。翌日自宅に電話があり、ゆつくり会うことになった。二人は立教大と和光大に籍を置いていた。聞けば、二人とも兵役拒否志望者で、「兵役問題で入獄している人数は韓国が世界一だ」という。ベ平連やジャテックの話をし、その後も何度も会っている。和光大の先生のロバート・リケットさんを連れてきたこともある。

リケットさんはベトナム戦争中の脱走兵。ただぼくらが知るような、日本からでなく、米本国からの脱走だった。幸い有効な旅券をもっていたので、ヨーロッパの国々を移動できたそうだ。パリ在住当時、ぼくらが日本から送った脱走兵（神田君）と知りあい、二人で反戦新聞『ゼロ』を出したそうだ。この新聞のデータは、あの戦争下のGI抵抗運動を詳しく報告したコートライト著『反乱する兵士たち』（1975）の付表にちゃんと記載されていた。立大生は、ジャテックの歴史から、数年前

道場親信さんらによる韓国兵役拒否者への支援にいたるまでを卒論にとりあげ、とてもよい評価を受けたという。

他方、以下の話は、日韓の新しい関係を模索しているある本协会会员から、最近うかがったことだ。ベトナム戦争当時、パク大統領の父親にあたるパク・チョンヒ大統領領はみずから米国に提案して、ベトナムに派兵した。8年4カ月間、延べ兵員は32万、米軍に次ぐ兵力だった。

米軍による住民虐殺事件として、悲しくも名高いのはソンミ村（死者は米軍によると、347名。ベトナム政府によると、507名の住民中、504名）の例だが、実は韓国軍もそれに劣らぬ規模の虐殺をしていたそうだ。ソンミは68年3月18日、ハミ村は同年1月24日のこと。ともに戦争の転換点になったテト攻勢のあった年だ。クアンガイ省のソンミから200キロほど北のクアンナム省にハミ村はある。ここでは、1歳から88歳までの村民350名が虐殺された。

韓国ではベトナム戦争はすっかり「忘れられた戦争」になっていたが、事件から30年以上たった1999年の『ニューズウィーク』誌の報道をきっかけに、週刊『ハンギョレ21』に1年間の連載記事を書いた記者がいて、大きな社会問題となるにいたった。行動的な進歩派、聖公会大学の韓洪九教授を中心にベトナム戦争真実委員会がつくられ、それは今、平和博物館の母胎になっている。ベトナム中

部のいくつかの村でも同様な事件があったことも明らかに、「ミアネヨ・ベトナム」（ごめんなさい、ベトナム）という歌をつくったそうだ。昨年1月ハミ村をはじめて訪れた代表団は生存者のハンティアおばあさんから話を聞いた。今年の1月24日、去年の約束どおり、平和博物館建立推進委員会ハミ村訪問団が慰霊祭に参列、韓さんが要旨次のような追悼の言葉を述べた――。

「……どんな弁明も、どんな慰めの言葉も、あなたの痛みを消すことはできないでしょう……花咲くこともできずに消えてしまった子供たちに、ごめんなさい、ごめんなさい……長かった生涯を振り返ることもできず悲惨のうちに亡くなってしまったハラボジ、ハルモニ、ごめんなさい、ごめんなさい……生きてこの悲劇を堪えなければならなかった遺族の皆さん、ごめんなさい、ごめんなさい……こんなに遅く来て、誠に申し訳ありません……」

……今回の慰霊祭には、韓国人だけで来ているわけではありません……日本が韓国に加えた歴史的な間違いを反省しながら、日本と韓国の新しい出会いをつくろうとするKAJAという日本の友人たちも一緒に参加しました……二人の韓国人学生にこの話をする時、「韓国軍は所詮米軍の備兵だっただけですよ。これからもっといろいろな事実が明らかになるでしょう」と語ってくれた。二人とも、兵役拒否の初志を貫徹中である。

（たかはし・たけとも／本誌編集委員）